

府立長吉高等学校
校長 原田 信尚

令和 7 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

一人ひとりの可能性をエンパワーし、多様な他者とつながり、多文化共生社会の主体を育成する学校づくりをめざす。

- 1 やる気を引き出し、基礎学力の定着と社会的自立に必要なスキルと態度を身につける。
- 2 全ての生徒にとって学校が安全で安心な居場所となることをめざす。
- 3 自主活動の推進、系統的なキャリア教育、社会課題の理解を通して、地域社会に貢献できる生徒を育成する。

2 中期的目標

1 基礎・基本の定着と「わかる授業」「考える力が身につく授業」づくり

（1）「わかる授業」をめざした授業改善に取り組む。

- ア 授業研究や公開授業週間を積極的に展開し、各教員が「わかる授業」づくりのための授業改善に取り組み、生徒の基礎学力の向上を図る。
- イ 生徒の学習意欲を高めるための評価方法を研究し、自尊感情が高まる授業、やればできると実感できる授業をめざす。
- ※ 自己診断（生徒）における「授業がわかりやすい」を、令和 9 年度まで 80%を維持する。（ R 4 84.7%・R 5 88.8%・R 6 88.0% ）

（2）「考える力が身につく授業」をめざした授業改善に取り組む。

- ア 生徒が「考える力」を身に付けることができるように授業内容を工夫する。（エンパワメントタイムの内容の充実を全教職員で取り組む。）
- イ 参加・体験型の授業実践を工夫し、生徒のコミュニケーション能力やプレゼン能力の向上を図り、円滑な人間関係の構築を支援する。
- ※ 自己診断（生徒）における「自分の考えや意見を伝える力がついた」を、令和 9 年度まで 70%を維持する。（ R 4 72.4%・R 5 78.9%・R 6 75.1% ）

2 安全安心に学べる環境づくりと進路保障の実現

（1）生徒の居場所がある学校づくり

- ア 様々な生活背景を抱える生徒を学校全体で受け止め、「誰一人取り残さない（中退防止含む）」学校づくりをめざす。
- イ S C、S S Wと連携し、生徒情報共有（学年・フォローアップ・不登校対策・職員）会議を行い生徒理解に努める。
- ウ 保健室・カウンセリングルーム・図書室・学習室（なかカフェ）や、関係機関との連携で、ピアプレッシャーに弱い生徒の居場所を確保する。
- ※ 自己診断（生徒）における「先生は悩みや相談を聞いてくれる」を、令和 9 年まで 70%を維持する。（ R 4 79.0%・R 5 80.8%・R 6 74.3% ）

（2）進路保障を推進するためのキャリア教育の確立

- ア C Cはじめ外部人材を活用しながら、入学から卒業後の進路を見通したキャリア教育を計画的に推進し、卒業生徒の増加と進路未定者を減少させる。
- イ 日々の学習が進路実現につながることを意識し、1 年生から 3 年後を考えた進路保障に取り組む。
- ウ 生徒の問題行動の背景・要因を深く掘り下げ、個々の生徒に応じた「寄り添った支援」を行動変容につなげ、社会的自立に必要なスキルと態度を育成する。
- ※ 就職内定率の向上をめざし、令和 9 年度まで 95%以上を維持する。（ R 4 100%・R 5 100%・R 6 100% ）

3 人権・多様性を尊重する教育の推進

（1）人権教育・国際理解教育の推進

- ア 個の尊厳を重んじ、教職員自身が人権意識・人権感覚を研ぎ澄ますことで、人権尊重に貫かれた教育を徹底し、いじめや差別の未然防止に努める。
- イ G S、C Dをはじめ様々な教育活動を通じて人権感覚を養う。
- ※ 自己診断（生徒）における「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」を、令和 9 年度まで 80%を維持する。（ R 4 93.1%・R 5 93.0%・R 6 94.3% ）

（2）多文化共生教育の推進

- ア 多様化する渡日生、帰国生の母語保障及び日本語指導を推進し、大阪のモデルとなるような多文化共生の学校づくりをめざす。
- イ すべての生徒・教職員が、様々な教育活動を通じて多文化共生を体感する機会を創出する。
- ※ 自己診断（生徒）における「多文化共生は進んでいる」を、令和 9 年度まで 80%を維持する。（ R 4 86.5%・R 5 88.6%・R 6 83.1% ）

4 魅力発信で選ばれる学校へ

（1）ながよしの魅力発信

- ア 生徒会活動を活発にし、魅力ある学校行事への改善を進め、部活動の活性化を図る。
- イ 地域と積極的に関わることやボランティア活動など「生徒の自主活動」を活性化させ、「地域社会に貢献できる生徒」を育成する。
- ウ 授業を積極的に公開するとともに、授業や行事等の様子を学校説明会やH P・S N S等を通じて発信する。
- ※ 特別選抜・日本語指導が必要な特別選抜での志願者の定員充足をめざす。（ R 5 0.96 倍・R 6 1.0 倍・R 7 1.01 倍 ）

（2）学校力の向上で選ばれる学校へ

- ア 新システムやI C T及びS N S等の活用を模索する。
- イ 情報共有の効率化や協働することにより、事務作業時間を軽減し、生徒と向き合う時間を確保する。
- ウ ミドルリーダーの育成及び初任者や経験年数の少ない教員の育成を図り学校力を高める。
- エ 働き方改革の取り組みを進め、外部人材の活用や同僚性を高めることで、校務の効率化を図る。
- ※ ワーク・ライフ・バランスの指標として自己診断（教員）における「計画的な休暇取得」で、令和 9 年度までに 70%を超える。（ R 6 は独自アンケートにて 64% ）

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和7年11月実施分〕	学校運営協議会からの意見
【はじめに】学校教育自己診断の生徒の回収率は、昨年比 10%増加（R 6 年 473 名⇒R 7 年 493 名）したが、今年度も多くの項目で好意的な回答結果を維持・向上することができた。生徒向けの実施形態は、昨年と同様 LHR での実施であったが、当日に欠席した生徒は、後日に回答してもらうなどして、担任が回収に尽力した結果が回答率の上昇に繋がっている。また、保護者の回収率の低下が昨年度の課題であったが、担任から生徒に対しての声かけをすることで大幅に回答率を増加（R 6 年 141 名⇒R 7 年 250 名）させることができた。 【結果と分析】 ＜生徒対象＞ ⑬「先生は、悩みや相談に丁寧に対応してくれる」については、昨年度より増加したものの、目標の 80%を達成することはできなかった。目標を達成するためには、これまで以上に生徒一人ひとりの家庭環境や特性を把握して、生徒と接する必要がある。また、業務の改善や削減を行い、教職員が余裕を持って、生徒や保護者と関わりをもつ時間を確保し、働ける環境を組織全体で考えていく必要もある。（R 6 年 74.3%⇒R 7 年 77.3%） ⑯「校則や指導について、納得できる」については、肯定的な意見が昨年度よりも増加し、目標を達成することができた。しかし、まだ約4割の生徒が否定的な回答をしている。引き続き、指導する意義を丁寧に説明し、ルールや校則が自分たちのためにあり、自分たちを守ることに繋がると思えるような指導内容を考えていくことが課題である。（R 6 年 54.6%⇒R 7 年 62.1%） ⑳「エンパワメントスクールに来て良かった」については、エンパワメントスクールの達成目標のめやすとしては上回ったものの、大幅に下がった。昨年度は 50 周年記念行事や式典という特別な行事があったこと、またルーツ生などの一部の比較的勉強が得意な生徒が増え、「学びなおし」の授業に物足りなさを感じている生徒が多くなったことも一因として考えられる。入学前に、本校の特色を伝えることに、これまで以上に力を入れる必要がある。（R 6 年 93.5%⇒R 7 年 80.9%） ＜保護者対象＞ ⑮「多文化共生が進んでいる」については、目標を維持することはできなかった。近年、外国にルーツをもつ生徒は年々増加しており、今後もその傾向が続くことが見込まれる。現在は一人ひとりに対してきめ細かな支援を行っているが、ルーツ生徒が増える中、こうした支援を今後も継続していくためには、業務の見直しや改善を進めるとともに、生徒や保護者が安心し、満足できる支援体制を整えていく必要がある。（R 6 年 84.4%⇒R 7 年 78.4%） ＜教職員対象＞ ㉑「計画的に休暇を取得することができている」については、今年度新たに質問項目を設けた。目標の数値を達成したので、今後も維持したい。一方で、17 名の教員が、否定的意見と回答していることを忘れてはならない。同僚性をより意識することや、外部システムなどを使い業務の効率化を図り、すべての教職員が働きやすい環境を整える努力を、学校全体で考えていく必要がある。（新規：R 7 年 73.0%） 【全体を通して】 一昨年から、全体を通して高い評価を得られている。このことは学校側の取り組みや指導方針が生徒や保護者に理解されていると考えられる。今年度、大きくポイントを下げてしまったのは、生徒対象の「エンパワメントスクールに来て良かった」の項目である。前述したが、「エンパワメントスクール（＝学びなおし）」に否定的な意見をもつ生徒が増えたということは、言い換えると「発展的・応用的な内容に組みみたい」という学習意欲の高い生徒が増えたともいえる。こういった「自信をつけた」生徒が増えたことは喜ばしいことでもある。ただ、一方で勉強が苦手な「学びなおし」が必要な生徒も多くいるので、個別最適でバランスを考慮しバランスを考慮した授業内容や試験の難易度を検証し、工夫していく必要がある。	●令和7年度 第1回学校運営協議会について 令和7年6月28日（土）10:00～12:00 1 開会のあいさつ（校長より） 2 委員と出席者の紹介 3 資料説明 4 報告 ① 長吉高校が力を入れていること・特徴・課題について ② ES8期卒業生の進路状況 ③ ES11期新入生の入学情報 ④ 各学年からの報告 ⑤ 令和6年度学校経営計画及び評価及び令和7年度学校経営計画について ⑥ グランドデザインを踏まえた府立高校改革について 5 協議 「府立高校改革に向けて」 【協議内容】 中学生の進路状況について、私学の授業料の無償化の影響と通信制高校への進学増が府立高校の定員割れの一因ではないかとのご意見をいただいた。府立高校改革について、中学校への情報がまだまだ不足しており、状況がつかめないとのことであった。保護者からは他校と学校説明会の時期が同じ時期であるため、複数回数の実施や平日開催の依頼もあった。また、中学校教員向けの説明会を実施し、中学校の先生方へ本校の取り組みや理解を深めてもらうことが志願者増につながるというご意見もいただいた。様々なご意見をいただき、今後の広報活動について改善、改良を加えていきたい。 ●令和7年度 第2回学校運営協議会について 令和7年10月29日（水） 14:30 ～ 17:00 1 開会のあいさつ（校長より） 2 委員と出席者の紹介 3 資料説明 4 報告 ① 令和7年度 第1回学校運営協議会まとめ ② 令和7年度 1学期授業アンケートについて ③ 学校教育自己診断の質問項目について ④ 分掌・学年からの報告 5 協議 「地域のなかでの長吉高校の役割について」 14:30～ 授業見学(6限)を実施 【協議内容】 地域の思いから創立し、50 周年を迎えて地域の中で長吉高校へ期待することについて協議した。矢田のふれあい祭りへの5年以上続くボランティアでの参加や、平野区こども子育てプラザで行われるイベントや祭りを通じて、地域との関りを深めていると評価をいただいた。継続的に地域行事やボランティアに参加することで情報発信として効果があると考えられる。生徒の活動の様子や地域での生徒の善行について褒めていただいた事例などを学校全体に広めることも大切であるというご意見もいただいた。地元企業や大学・短大に進む生徒も多く、地域に根差し地元に必要なとされる学校作りにむけ、「一人ひとりの可能性をエンパワーし、多様な他者となつがり、多文化共生社会の主体を育成する」本校のミッション遂行に取組んでいきたい。 ●令和7年度 第3回学校運営協議会について 令和 8 年 1月 31日(土) 10:00～12:00 1 開会のあいさつ（校長より） 2 委員と出席者の紹介 3 資料説明 4 報告 ①令和7年度 第2回学校運営協議会まとめ ②令和7年度 2学期授業アンケートについて ③学校教育自己診断の質問項目について ④令和7年度学校経営計画及び評価及び令和8年度学校経営計画について 5 協議 「学校経営計画及び学校評価について」 【協議内容】 生徒の学力、家庭環境、国籍や言語背景などの多様化が進む中、学力面では二極化が見られ、一斉授業のみで対応することの難しさが共有された。中学校では1人1台端末やデジタル教材を活用した個別最適な学びが進められているが、教員の負担の大きさや活用状況の差が課題として挙げられた。高校においても、習熟度の違いを前提とした授業改善が必要である一方、学力による分断を生まないことが重要であり、学校行事、探究活動、部活動、異なる集団での学習活動などを通じて、生徒同士が交流し相互理解を深める機会を意図的に設ける必要性が確認された。また、不登校経験のある生徒や日本語指導を必要とする生徒にとって、エンパワーメント教育や学び直しの仕組みは不可欠であり、学校として継続的に保障すべき基盤であるとの認識が示された。進路指導については、就職内定率 100%という成果が報告されるとともに、内定獲得を最終目標とするのではなく、卒業後も社会で働き続けられる力を育成することが今後の重要な課題であることが共有された。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標〔R 6 年度値〕（案）	自己評価
1 基礎・基本の定着とわかる授業づくり	（１）「わかる授業」づくり ア 「わかる授業」づくりのための授業改善	（１） ア・生徒の学習状況（実態）に基づいて授業の見直しを行う。その際、取組みの工夫を各教科で提案し教員全体で共有する。	（１） ア・他校の参考になる授業等を見学し、教科共有する取組を１回以上実施する。〔１回〕 ・公開授業週間を年間２回以上実施し、それらを活用し教員相互の授業見学を２回以上実施する。〔公開授業週間３回、授業見学２.４回〕	（１） ア・D X加速化推進事業で先進校を訪問（３校）。授業アンケートの結果を共有し、教科毎での協議の機会を持った。（○） ・６月、１１月及び１月に公開授業週間を実施し、教員相互の授業見学を一人平均２.５回実施。（○） イ・学校教育自己診断「授業のわかりやすさ」（生徒）の肯定的回答 86.2%（○）
	イ 自尊感情が高まり、やればできると実感できる授業の実施 （２）「考える力が身に付く授業」づくり ア 「考える力が身に付く授業」づくりのための授業改善 イ 生徒のコミュニケーション能力等の向上	（２） ア・新学習指導要領に沿って「考える力を生徒自らが身に付けることができる授業」の開発に取組む。 イ・教育活動全体通じて、生徒のコミュニケーション能力、プレゼン能力を伸ばす。	（２） ア・「考える力を育む授業」「多面的な評価方法」について少数での意見交流ができる機会を２回以上実施する。〔１回〕 イ・自己診断「自分の考えや意見を伝える力がついた」（生徒）の肯定的回答 70%以上の維持。〔75.1%〕	（２） ア・基礎力診断テスト合同分析会の結果や次年度新入生（日本語指導が必要な生徒の増加）に備え、各教科での意見交流を行った。（○） イ・学校教育自己診断「自分の考えや意見を伝える力がついた」（生徒）の肯定的回答 76.5%（○） 【自己評価】観点別学習評価をブラッシュアップ（定期考査をなくす・別の形に変える議論）し次年度進める。
2 安全安心で魅力ある学校づくり	（１）生徒の居場所がある学校づくり ア 「誰一人取り残さない学校」づくり イ・セーフティネットの拡充	（１） ア・生徒情報共有を活かし、多面的に生徒・保護者にアプローチしていく。 ・１学年は中学との入学前聞き取りや中高連携を密にし、生徒・保護者の支援にあたる。 イ・保健カウンセリング部を起点として、S C、S S Wとの連携や各学年・分掌との連携を強化する。 ・生徒情報共有会議を更に活用し、生徒支援力を高める。	（１） ア・自己診断「先生は悩みや相談にいてねいに応じてくれる」（生徒）の肯定的回答 80%以上。〔74.3%〕 ・自己診断「担任等に相談しやすい」（保護者）の肯定的回答 65%以上をめざす。〔62.4%〕 イ・生徒情報共有会議から各学期に１回、職員全体への生徒情報共有の場をもつ。〔不登校対策会議全３回の実施〕	（１） ア・学校教育自己診断「先生は悩みや相談にいてねいに応じてくれる」（生徒）の肯定的回答 77.3%と昨年度より上昇。（○） ・学校教育自己診断「担任等に相談しやすい」（保護者）の肯定的回答 65.2%目標達成（○） イ・不登校対策会議を５回実施。より丁寧に情報共有と支援に活かすことができた（◎） ウ・全体の図書委員会を１回開催。昼休み等の図書委員による図書当番も実施し、並行して「お薦め図書」MAPを文化祭前に完成させた。次年度は居場所づくりとしての新たな活用方法を検討する。（○）
	ウ 図書室の活性化 （２）キャリア教育の確立 ア 外部人材を活用しながらキャリア教育の推進 イ 将来の進路や生き方について学ぶ機会 ウ 社会的自立に必要なスキル・態度の育成	（２） ア・C Cの活用で生徒・担任・進路指導部員の連携充実を図る イ・１年生から３年後を考えた進路保障に取り組む ・G S・C D・L H Rなどで将来の進路や、３年間を見通したキャリア支援計画を検討し具体化する。 ウ・問題行動の未然防止に取組み、社会的自立に必要なスキルと態度を育成する。 ・生徒が自主的にあいさつやお礼を言うように、教職員から生徒へのあいさつ等の声かけを行う。 ・教員間や生徒間で、校則や指導について意見交換や見直しを図る機会をもつ。	（２） ア・就職内定率 95%以上の維持。〔100%〕 ・外部人材を講師とする校内研修を年間１回以上実施する。〔１回〕 イ・自己診断「将来の進路や生き方について考える機会」（生徒）の肯定的回答 90%以上の維持。〔93.0%〕 ウ・懲戒件数を前年度程度に抑える。〔44件〕 ・自己診断「あいさつやお礼を言うようになった」（生徒）の肯定的回答 85%以上の維持。〔87.3%〕 ・自己診断「校則や指導について、納得できる」（生徒）の肯定的回答 60%以上をめざす。〔54.6%〕	（２） ア・就職内定率 100%（○） ・「福祉的就労について」研修会を１回実施。（○） イ・学校教育自己診断「将来の進路や生き方について考える機会」（生徒）の肯定的回答 91.9%（○） ウ・懲戒件数は79件で、前年度より増加。（△） ・学校教育自己診断「あいさつやお礼を言うようになった」（生徒）の肯定的回答 90.5%（○） ・学校教育自己診断「校則や指導について、納得できる」（生徒）の肯定的回答 62.1%（○） 【自己評価】コミュニケーションの基本となる「挨拶」の意味を入学式や式典で繰り返し伝えた。正門での挨拶運動や教員間での実践が学校全体に浸透することを更に進める。

府立長吉高等学校

3 人権・多様性を尊重する教育の推進	(1) 人権教育の推進 ア 人権尊重に貫かれた 教育を徹底し、いじめや差別の未然防止	(1) ア・「互いの違いを認め合う」こと、人権尊重の知識と態度を養い、すべての教職員が授業・生活指導の場面で取組んでいく。 ・年3回のいじめアンケートを実施し、課題のある事象への早急な対処を行う。	(1) ア・自己診断「エンパワメントスクールに来て良かった」(生徒)の肯定的回答 80%以上の維持。[93.5%] ・自己診断「先生は、いじめについて私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」(生徒)の否定的回答 10%以下の維持。[7.6%]	(1) ア・「エンパワメントスクールに来て良かった」(生徒)の肯定的回答 80.9% (○) ・アンケートは3回実施。学校自己診断「先生は、いじめについて私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」(生徒)の否定的回答 5.5% (○)
	イ G S、C Dを始め様々な教育活動を行う。 (2) 多文化共生教育の推進 ア 渡日生、帰国生の母語保障及び日本語指導を推進 イ 多文化共生を体感する機会を創出	イ・3年間を見通した人権教育計画を作成し産業社会と人間、G S、C D、H R等の取組みを通じ、様々な人権課題を学習する。 (2) ア・増加の一途であるルーツ生に対し、個々に応じたきめ細かな指導(早期に生徒・保護者との面談を行うとともに出身中学校・関係機関との連携)を行う。 イ・外国にルーツを持つ生徒と他の生徒との校内での交流を促進する。	イ・自己診断「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」(生徒)の肯定的回答 90%以上の維持。[94.3%] (2) ア・ルーツ生(日本語指導対象生徒含む)に対し、学習や生活における課題を解決し、希望する進路が実現できるよう取組む。[2・3年への進級率 97%・3年次卒業率 100%] イ・外国にルーツを持つ生徒と他の生徒が交流できる行事を1回以上企画する。[2回] ・自己診断「多文化共生は進んでいる」(生徒・保護者)の肯定的回答 80%を維持。[83.1%・84.4%]	イ・学校教育自己診断「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」(生徒用)の肯定的回答 92.7% (○) (2) ア・3年ルーツ生の卒業率は90%、1・2年生各進級率は 97%・82% (○) イ・多文化研究会が文化祭で自国の踊りや料理等を披露。出前授業(支援学校と2回、小学校と2回)で交流機会を作る。(◎) ・学校教育自己診断「多文化共生は進んでいる」(生徒・保護者)の肯定的回答 83.8%・78.4%(○) 【自己評価】 万博への全校遠足を実現し、多文化共生を意識する契機となった。また、校内研修や勉強会を3回行い、ミッション遂行に向けた教職員のチーム力を高める好機となった。
4 魅力発信で選ばれる学校へ	(1) なか=よし魅力発信 ア 学校行事の改善 部活動の活性化 イ ボランティア活動を活性化 ウ 学校説明会やホームページを通じた広報活動	(1) ア・生徒の学校行事への満足度を向上させる工夫をする。 ・新入生の部活動加入や各種の行事や取組みへの参加人数増加にむけ、生徒部・学年を中心として全教職員で取組む。 イ・「生徒自らが主体的に活動する」機会の創造。 ウ・公開授業週間に授業を公開し、保護者及び中学校の先生方に見学してもらう。 ・HPを通じて生徒の高校生活や授業の様子を掲載し広報活動を行う。	(1) ア・自己診断「学校行事に満足している」(生徒)の肯定的回答 80%以上の維持。[90.9%] ・自己診断「学校に行くのは楽しい」(生徒)の肯定的回答で 70%以上をめざす。[68.9%] イ・自己診断「学校行事や委員会活動、部活動に積極的に取組んでいる」(生徒)の肯定的回答 70%以上の維持。[76.8%] ウ・保護者や中学校教員に向けた公開授業を2回以上実施する。[3回] ・学校行事や授業の様子をHP・SNS等で紹介する。(月5回以上更新する。)[8回]	(1) ア・学校教育自己診断「学校行事に満足している」(生徒)の肯定的回答 91.1% (○) ・学校教育自己診断「学校に行くのは楽しい」(生徒)の肯定的回答 70.4% (○) イ・学校教育自己診断「学校行事や委員会活動、部活動に積極的に取組んでいる」(生徒)の肯定的回答 77.3% (○) ウ・保護者や中学校教員に向けた公開授業を3回(6、11、1月)実施。また、8月に中学教員対象の学校説明会を実施した。(○) ・SNSでの情報発信(63回)や校長ブログ(200回)により、月平均20回以上の情報を紹介した。(◎) (2) ア・学校教育自己診断「電子黒板等ICT機器を活用し、授業を行った」(教職員)の肯定的回答 96.8% (○) イ・ストレスチェックの総合健康リスクの数値83(◎)。 ウ・教員研修を6回実施。(○)
	(2) 学校力の向上 ア 新システムやICT及びSNS等の活用を模索する イ 情報共有の効率化や協働することにより、事務作業時間を軽減し、生徒と向き合う時間を確保する ウ ミドルリーダーの育成及び経験年数の少ない教員の育成 エ 働き方改革の取組みを進める	(2) ア・新システムを活かし、業務の効率化やICT等の活用を進める。(生徒情報の一元管理を図る。) イ・教職員の事務作業を軽減し、同僚性を高めて協働することにより、生徒に向き合う時間を確保する。 ウ・日常的なOJTや各種研修を通じて、ミドルリーダー・教職経験年数の少ない教員の資質と能力の向上を図る。 エ・ビジネス向けのSNS等を活用し、教職員への連絡・周知事項の徹底や、会議時間の縮減を図る。 ・校務の負担感の低減、同僚性の高まりが実感できる職場づくり。	(2) ア・自己診断「電子黒板等ICT機器を活用し、授業を行った」(教職員)の肯定的回答 90%以上の維持。[96.9%] イ・校務の平準化や削減に取組み、ストレスチェックの総合健康リスクの数値を府立学校の平均以下にする。[96(府立平均98)] ウ・教職経験年数の少ない教職員を対象とした校内研修を学期に1回以上実施する。[6回] エ・年間を通じて1度以上、月間の時間外勤務が45時間を超えた教員数を昨年比10%縮減をめざす。[26人] ・自己診断「計画的な休暇取得」(教員)の数値が70%以上をめざす[64%]	エ・45時間超の教員数は昨年度比 96%(25名)(○) ・学校教育自己診断「計画的に休暇を取得することができている」(教職員)肯定意見は72.6%(○) 【自己評価】 ストレスチェックの総合健康リスクの大幅減の要因を分析し、一層の校務の負担感の均等化と同僚性の向上に努める必要がある。